秘傳大人小兒衛生論

坤

ヤ 9
1124
2

ヤ9
124
2

91-2039

宮内省図書寮

西本願寺蔵書

秘傳大人小児儒生論 石野 坤ノ巻

病気の表へわらはれをして内を害となして
死する事とのべしむる事

世上小病気のおりてへ乳をおそひうらび毒に死するの有
又今朔をハ云へりみて病乳乳を含ざる書ハ命なりといふの有
又病乳ハ何の病といふ知れてそれ〻〻の茶とわて毒にても巧なく
して死するもあり

右之乳ハ未命の齒根ハあらびして脇の内れ咲出へおそれ
ばまく毒と乳わるしも毒へばるけとのべて世上ふきらしも
松又ば表にもるを乳川合考心とこゞめて、もちいてだわし。

人の死る期れ事

人ハ天地陰陽の惣てなれバ一年ハ春夏秋冬の四季有ごとく一日ニも四季有て六つより二つハ朴十歳とこのごとく四つより九つまハ八十歳と次て髪の盛なるごとく八十歳六十歳より七十歳と秋の霜ごとく〳〵所がごとく八十歳より百歳とを久くの枯しがこ歯ひ〳〵人せ成長して年老て寿命の歯ハ抜りたゝ炙バ灰火の油歯て消ごとく〳〵冬ニ成木の葉枯落草木の枯しがむがこと〳〵て血減て髪髭白く成肉ハ脱身疲冒の気骨て食物入難へ物ならぬして力と物ならぬ神気衰用ゝへバ心ごゝろ〳〵ゐと不覚心魂消終が命の歯期なべ〳〵ふ

髪ハ未黒肉脆ぬ用もゝく耳もゝく失気も性て死るハ命の長ハ短ハ胸中ニ災害ハ胸中ニ災害ハ胸中の災害ハ世人卒中風或ハ傷寒治ぬるひハ虚労補と不文の死去病ハて死るハ毛非なゝ又病気ても未髪黒気性成死るハ胸中のさるべ〳〵ハ裏へ出て色ニ害とゐる事有也ハ胸中の災害ハ蛔蟲也

世上蛔蟲て病とゐ〳〵命とも〳〵不知大人老人ハ多ゐて いろ〳〵の病となるものとゐらぬ毛胸の内ゐる也へハ外へ出ぬゐる也へ也ハ中年朱若壮ゐる人中ニ老人ハ此ゐ有てハとひらぬ死せ〳〵ゐ出ぬ朱又ハ黄ハ蟲と去業とゐらいて色〳〵の病を妊気せ〳〵ゐ数〳〵有て危事を

道〻の有又醫師の素論をさとり迷ひ治せしゆゑ
あり〻也とさし書に書るりて世上へ出すべし

蚘蟲の恐さ事

①醫方集解に曰若飲食不慎血氣虛衰又能
變生諸蟲人不能殺蟲則蟲必且殺人

○萬病回春曰蚘蟲者胃中濕熱生也
人の腹中に胃に食滯すれば蟲湧り有濕熱ても湧也
是と蚘蟲〻〻熱〻ても多ハ合ひこれ〻〻さきて
湧也是腹のうちなる虫へおそれを醫師まもれん
をけがさざる有ての也是ほ惡せざれば大害をなし
○入門に曰蚘蟲長一尺則者心貫落命甚急也

○回春に曰白蟲黑色兼則者靈丹從腹病難安
右通医書有て古人も甚恐ひ〻〻是ほど大い蚘蟲湧ても
おそれに不知虫日を経て知ずてふくもなう伸て心を費の為類
をなし〻〻又ハかぞ〻く腹て心下ぶり食を為絶あやまちをなす
虫へる是蟲の湧なを見ずけ病知日を重く右し熱をなす
故之絶代書の表を引合せ知る右蚘蟲の湧なるを者是を見ずけ知て
むしを除去をりと用るの時ハ右ふる蟲必人を殺の類もなく又心を
費て命を落るの為なりこの類もなく〻又白蟲ほ〻ふなりく
靈丹服又服とも病安がう〻〻とこの類ハなかるべし〻〻
蚘虫ノ評に曰古賢〻名医も蚘蟲のゆへところちゆへぞ外
医書に為ハ蟲湧てはへ知るかうちを見くむし〻あること知て
治薬を用ひし〻〻とこへく治こ萬病回春に小児冬月蟲を

吐スルニ錢氏白朮散を与るしもり虫ハ春夏秋冬ともふ時に
湧生じ別ち去の赤陽乃発する時秋の始陽乃藏とこと
なく生ズ○又傷寒虫を吐するに理中安蚘湯を用ニ仍虫も
にへ出ずるとあるその治方なり　見尾車よあらびや
蚘虫にへも不出大役にも不下して後よ湧て月を経てふくく
出くなるゝバ如何　見ちよふくなるゝをなべし
今の君子加減ぐさく
吊見を傷寒痢病も熟ゆてちらにむしを湧生じにへも
不吐大役にも不下あしを脱を見て見を考しに治薬を与へく
おもて見へざるに大役よりむしをげしなるゆを△又小児をうそう
の若にへも不吐大役にも不下にちゝを見く蚘有をさし
治薬を与へて大役より虫を解しるゆまくゆ絶て見を考ぐれべ
傷を治しても虫のゝあゝ害せらるゆゆ治薬むしのあるよ

巧なくあるそうしあげて出のあるよりやまちをなるべし
ゑ邪小児ハあくあるて只何とかくむしのゆゆでゆゆん
あし○又大人老人も不時に湧生じ又脳の使を妨いろくの
病をなるゆゆ仍る見を知くきあんとあゝざるようの偽
狂又むしのゆきたるをあくゆ見ゆけ知治ものよろしき
ゝすりを知ゝして右の新をのゞ見しむよくゆ仍みて
おりひゝゝゝ病をのゞ見しべし是者なる人ても内ゝり
害をあせばすべきゝゝゝなるし　びやゝみんハなをのゆや
ちゝにむし　ゆきあべゆゆざらひとなるべし見をちゝを
見ゝく知仍仏あるてにちるせし　なり
又病氣に的歯の薬用ゝも勝腑の外に虫をさイあゝバ蟹いと歳て
ゝ素ゆゆるべし又治ゝゝ長ゆらバぜひ今を治べし

世上積とのゝ心ゆ蛇蟲とゝなるとあらざれば蛇蟲の分理を
考ふ能心ゆかざれば急に死ぬるなり人の身は大成
難也ひとけハ形は表迹不能考ひ表にあるに素と関て
たゝ〳〵多へ

世上に適〳〵蟲大成へ下にへあるなり有虫の敢て見て見る虫のさま
たる〳〵知なり人生〳〵蟲多なるゆ故に大成へ下上へ上り口へ出る也
虫湧て日を経て多成花ゆるさなる也ひたゝ〳〵ひゝたる虫
口へ出るを見て虫を刻て見〳〵蟲の中に細虫多あり事
見る見る〳〵それば捨置ば次〳〵に成て多成べ〳〵終上害と
なるゆ遠ち〳〵たとひ一寸ばかりても去ざれば害〳〵成
腹の中ハ脆六腑にて又神とたゝかひ〳〵若虫〳〵なるあれば

腑腑の分に生ずるなり人の生ずるもの見ゆ〳〵いろ〳〵の病となりて
一人も病れば心〳〵さ〳〵ことに息と止なるべ〳〵又蟲さてはへも
出大成へも下出ぬ色〳〵の病と〳〵〳〵怪れば見とゝ〳〵知なり
肝要也腎傷寒痢病頭痛疝氣の類ハ病皆知れも蛇蟲
腹の内なるもの〳〵乱心も知れ分ハ行見へざる也依く腹内に
蟲のさなるを知ずとは不ならむ

大人老人蛇蟲のさまると知事

○ちや〳〵のごと〳〵おゞへる○不食て乳むつ〳〵く成○心下かく〳〵成
○はらかく〳〵なる但ちらハやとらるゞよ〳〵○むかむち胸とかさなる
ごと〳〵おゞめる○はらにごらつさう様りもしぶりでさる○ちらぶく
ちるまり有○はら〳〵なり〳〵様つ出るなもあり○小便色ごとかく

成る中有蟲へもうきゝ出ることあり

白い虫膀胱へさゝこゝ水のたまるなとこゝある中虫こゝ小便

通じがゝけら新うきおるゆへ糞こゝハ不治けれ新こゝ出ることこゝ

虫を去小便通じてこれひゝも

○のごときへいのゝ中へ○つゝと新きゝ○かゝ出つきを

かゝを○わくけらいたむ但をらいなれもあり○むゝのいたゝハ

わくやゝこゝいたむ也口びるゝこゝあかくなる

世上食澤こゝ腹いたゝなゝ死ゝ〳〵ふるあれども今蚘蟲

ひ○うごきてゝらいたゝ心とつらはき死ゝる中也食たいハ

茶こゝ治せべ〳〵食たいこゝ死ゝる中ハ二月ゝ中ハ

もゝをゝ心ゝ用心あるべ〳〵

大人も腹よゝ分なれバやゝらゝ成をの也心下かゝこゝはらゝ痛くり

ちゝ〳〵えりはらかゝ〳〵いきゝめこゝ出ゝきゝる也けゝふゝを八月分八月ゝ

ゝゝけれバ消えも人ゝさゝらゝゝ出ゝ〳〵ゝ

やゝらゝ中ゝおゝさゝゝゝり月れバ新なゝうけ新ゝさゝあゝる病新の

おゝき痛ゝえハなけれゝゝる虫ひゝ中ゝ〳〵長なれバ後ハ

命ゝとゝおゝゝゝし心ゝ右し極ゝあゝハたく藥ゝもちいゝ中ゝ〳〵

海人艸 水であらいきざみ日ゝかゝて分ゝ中ゝ 苔 煉根皮 三分 せんだんの根のかゝ也上のあゝき不ゝとげゝり白き不ゝとゝきざみゝゝり ろゝろゝくゝて 栩

陳皮 三分 栩 半夏 三分

茯苓 三分 檳榔 三分 蓮根 三分 耳艸 三分

毛を退蟲湯と名づけて右を煎ゝのむゝきハ病くゝと去心下の痞ゝ

ゝゝひゝきすかゝ虫ゝきてゝれバ大仮ゝゝ下て心ゝゝなる虫なくゝて

かまつなり心下とうゝひらきすかすの如あり常にたゝいたゝて拔く
あちこちて法病おこらざるべし是後中とうゝそのるゆへなり
もゝ右ゝくさりとあちこちてたらざるむしあり八虫ひゞたるゝ心れたる
しるを藥ふとゝふゝもちて又右ゝ追蟲湯と二ぶゝもちい
なば虫ことゝゝく去ゝちゝゝゝ治せべし

消蟲湯

使君子 ま乙 檳榔子 五分 苦楝根皮 三分

此三味せんゝ煎ゝもちいなば股のいゝゝゝ逐治せべし
此藥八股のうちて虫と穀の業て脾胃のあるゝゝ
何病ゝるかいよいたゝぬ也右ゝ追蟲湯をもちいて股ゝむ
ことゝありゝるおどろくことたゝ右ゝ叫よりもちて後中ゝゝ
虫ひゞて腹ゝむの論多蛇蟲を用心して宜事

股ゝ蟲生じても始のろいきそいたむるなみれども腹ゝ
長なりてうゝゝ虫たらゝむ也又右追蟲湯八虫と追追る
藥たる虫と虫いまゝひゞざるゝゝもちいてゝ逐大後
まゝり下なり又ひゞたる時八蟲の勢力強又後のうちゝ侵れ
入ゝくなる虫下まゝとまる業八追おろさんてまるゝて蟲
くゝゝ悩虫股痛也ゝむ八虫のひゞたること心れ痛なゝば
狂ゝ右の藥をもちゆるなゝばつゝ八追追痛も治股ゝもる
腹ゝ蟲生るゝ八汗ゝ有まゝとゝいふゝ定ゝ又なゝてもの用
ゝゝあるやうゝゝゝ湧てもおゝて、それて不知なゝ
只積のごゝくおゝゝるゝゝば右ゝ追蟲湯をもちゆべし
虫股ゝきゝてゝば去夫股中ゝゝなゝて蟲の為ゝ死ゝる
別なるべし

男女十にゝ歳より十歳前後不食乳むつ〳〵て行るゝ事ぜわく
熱出病乳〳〵又〳〵汁灸素絡ゝ有世上乳のかさらがい
〻〳〵心以種〻の療治とゝ〻とゝあり矣毛虱虫蟲の湧て右の
種とゝ〻て業を〳〵かゝ〳〵てそれ〳〵和ざる事へ絶〻あやまち〳〵成
右種の病わらばきゝあて虱虫蟲のゝさたるとゝりてゝ〻く有く
二方と用ゝ〻〻虫蟲下て快然をべ〳〵虫大後ゝ下るとゝ〻めゝとゝ
毛蟲湧て不食ゝ有ゝ事へ乳ぜいゝ〻〳〵乳むつ〳〵成乳ぜいかさ事へ
わらゝとゝして乳幣のごゝ〳〵成毛と又和の素とゝらいて
功〻〳〵して絶〻あやまち〳〵成ひの者
但し症乳ハ性て虫ハ不食て乳むつ〳〵乳ぜいかさのゝ有り
右〻〻症わらばハ右の二方ハ業をらいてだめ〳〵ゝんゝふべ〳〵 虫蟲

大後ゝ下て ゝ迫ゝ〳〵成也
男女ゝ傷寒刺病ゝ〻の病乳ゝ有ハ熱ゝて腹中ニ虫
ゝ〻ゝあれゝ表へそれ〳〵和〻〳〵
但病人の腹とゝびのさきてやゝらふさぶりゝるべ〳〵腹の内
かゝ〳〵又ハゝ〳〵乳ゝ有ゝ腹れつゝゝの有ゝ事でゝりごゝらゝく
ゝふゝらバ虫のゝさゝてあゝ〳〵紙べ〳〵かの業をゝめゝるわゝく
追蟲湯とゝ〻ゝ〻ゝ周ゝふべ〳〵虫のゝさゝてあれゝ去腹の内十分
〻〻あれゝバゝゝ病乳業ゝよ〳〵行絶ゝあゝゝ業をゝめゝる
腹の内膀胱ゝ〻ゝ生ゝる虫蟲湧てあゝバ又ゝ虫病乳の藥
ゝゝゝうゝ〻めるべ〳〵又ゝ〳〵ゝくゝゝバゝゝゝれゝゝゝ害ゝゝゝすべ〳〵
腹ゝ蟲湧て害ゝゝゝ虫ゝゝゝて 畢

世上の人腹れ門ニハ蟲あるもの〳〵心ばえ人有色大腹張也腹の
門ハ肺肝心脾腎の五臓〳〵膽胃大腸小腸膀胱三焦乃
六腑の部ニハかゝるもの也
其人ハ父母の陰陽れ氣和合して胎と成て又母ニ蟲と有精氣
と成るニハあらぬ也世へ出て後ニ食の有熟のゆゑ也て湧て
いろ〳〵の病氣となるなれバ元来ハかゝるもの也たゝ名バ菓ニ蟲
のゝ〳〵ごと〳〵桃栗梨子柿の熟れの時ニ蟲ハかゝれども氣
雨の為ニ実入悪ゆるニハ蟲と成て落る者実入のさとり
かゝるゝ〳〵ニハ〳〵ゆゑ〳〵悪めるニハ〳〵人の腹の内も
〳〵ゆゑ〳〵〳〵有ゆゑ〳〵て又何ゆゑ〳〵べきや計がし
一抱子の本艸ニ曰蚘蟲除べらゝ食こゝれゝ〳〵俗説あれ

大腹張也蚘蟲ハ菓ニ蟲のせゝゞ〳〵柱ニ羽蟻の湧ゞ〳〵
毛木の朽るゝるゝせゝゞ悉去盡べ〳〵不去バ生と蟲〳〵有ハ
蟲ハあるべきものゝ〳〵張也　蚘蟲人と俱ニ生と云説あり也又張べ〳〵
是と成元来ハ〳〵〳〵て後ニ湧せゝゞて害と成也恐〳〵きゝ
知べ〳〵又腸胃ハ有れば蟲の啼抓〳〵ふ虫の〳〵〳〵云ハ
〳〵ら〳〵〳〵也魚鳥の腹ハ老〳〵人ゝる也虫多て山海と
龍沙自立〳〵魚鳥ても腹ニ虫湧ゞバ悩ゞ有んゝ者
〳〵の腹ニ蟲あ〳〵バ害〳〵て成ゞ朋也
蚘蟲〳〵〳〵ていろ〳〵の病と成ゞ有り〳〵と不知〳〵て死事
あり〳〵と腹と人て〳〵と知蟲と去薬と〳〵いて色〳〵の
病ゞ治せ〳〵ゞ教く者〳〵とあ〳〵ま〳〵ゞ次ニ云る也

五十歳の人久〳〵不食て氣むつゝく成人並のようでさえ
氣病多くあ親心怪遊〳〵保養させ〳〵数日薬飲ませ
平生と変て脉を診るに実にて寛多り腹とゝのゝ心下堅土
多板のごとく臍の廻り強て大使のようを尊しゝ
常の色〳〵ふ色蛔蟲湧悩みを知則追蟲湯を用ゆ遣
て腹内に赤虫あるを大使より下て心下に和ぎ食もも
粒又こぶ〳〵用て虫ともに大使より下て腹和やらぎ食
いよ〳〵もゝみ粒多元氣身体の色快氣せり也

六十歳に成女腹痛強く〳〵悩醫師色〳〵薬とあらゆ〳〵痛多
不止平生と変て診脈せ〳〵脈数多ありて熱も多あり
腹を按ずるに臍のめぐり大ごとつよきあり色蛔蟲のようさ

かるゝと知るべし右追蟲湯を用ゆ〳〵病人大使消て
後腹痛止て人者隠と成て虫数多固て下り也虫多て
痛不通止〳〵あり

四十歳の女心下はり不食て心悪〳〵かゝるゝ物多く二三日
も食もまゝ腹もりて心悪〳〵是癖ありて香砂平胃散
木香丸の類用て強く〳〵いよ〳〵腹もりていさぎよくあるを
腹と成るふたらかゝ〳〵脉実にて強く色全蛔蟲湧たると
考ふ追蟲湯と知り〳〵呑て呑むと虫大便つれて三度下る
粒又こぶ〳〵ちい〳〵虫十日ゝも大使つれて下心下らく悪さ
腹のもり止食もみ多の色快氣せり〳〵あり

三十六歳の男肺こうさ出熱もおゝきありて醫師猪苓沢瀉の

小便通薬を用ゆべし尿道をみて大方蚘蟲湧膀胱へ
さし也小便不通になる也へおちんとおもふてもとめて追蟲湯を
のましむるに赤虫三ツくだりて小便よく通じ一あるめて
数のうきうしていつまるなし是虫ぬの為とふさぐる也なり
四十歳計の男胸落をり不食にて氣力落痛ありと心にて黒丸子
木香丸の類を頻に服し尿風多をと以て脈を診に疳積の
脈ありて腹をみるに心下かたくさらにちがひなし蚘虫乃
下りなし家追蟲湯を兼ねて服むるに心下きさ和に食進
力付ぬを後より一両日経て赤虫ハつ大便より下りし也
右ことさしまる病氣もみえハ只胸落をり不食にて氣力
おとろへぬぞりにて格別の悩もなかりしに虫ハつ大便へ下し
表へハそれとしらへだして出けり若し捨置蚘虫ひとつにて其廿一人とも
あらバ後患を貫て命を落すべき也
三十歳の男時疫の為に悩数日病牀に臥て腹薬せり尿少節
みん近熱にて蚘蟲の湧るなるべし病の素乃ろことにむしを
解薬と一所に用てしかとべし勧て追蟲湯と一所にのましむるに
一日経て赤虫三ツくだし大便より下り病氣後に快氣せし也
此熱の有べき為也たとへ熱退ともし虫湧て居バおもてへハ不見
なれバ虫のためよ害せられん病人ハ脾胃の運化よろしく
多く熱あれバ悪虫ゆるしまするものなり若虫なきなバ是が為に
薬もさらぞ悩すなべし病人の程くは心にて先虫を去退る薬
とをらいたバよろしきといふするよく心得べきなり

四十歳の女全神疲労熱久遠ろ初うさ夜脚とるそれ氣
ひもぐれてるる〜年色と生て大ず蛔蟲のさざて熱
脚うさそれる多べ〜と生るめて追蟲湯とのませこ〜
用て赤虫七ちぐ下て熱のうさ減後と五苓散とちいて
脚のそれ悉引者の色多る〜

色世ちまく有多て虫たらるる湯長成水の乏さ〜也也ま
水氣のれること常うきと成それること有什熱小後多る
藥行程ちちいても功なきもの也虫と解茱をもちいて
大後ろ虫下て多逆小後まく色ぐうきはれ減也世工ちぐ示也

計十歳の男人吉と吐腹の内堰ありて心下へさ〜の一ろく痛
不食熱出て雖後ろり醫酉師積氣のさざりとて

七氣湯の熱收ろもも強多〜醫酉師と少へて腹素せ〜む痛
不治大後遠して心下へさ〜の一ろく不止年色と生て脈と診に
実にて寛腹とそ〜心下かさ〜腹もかさ〜色全蛔蟲乃
ろぐ多りと〜て始に使君子入と示や用て後に追蟲湯と示
ろく用〜に白虫收〜大後ろ〜れて下痛止腹の堰ろ〜熱退
快然せり

六十歳の女久〜〜積て歩卧不食して身骨〜皮と痩熱出
苦ていて今も息絶ろんとるるていに氣ろ〜親族ろの集
居ろり年立ろ診脈せ〜に脈數ろり腹と見るに胸落よ
握こぶ〜のごとくろる塊色の上りて有年ろ日色蛔蟲也と云
親族の曰恐積こて塊ろ彩ドて色く茶ちちれどる強ろ〜

をとゝやけさ〳〵とふ中ゞ曰全蛔蟲也然るをとゝや素功なほ
さりながら先用ゐるべし〳〵則使君子入の消蟲湯と云ふ
ま〳〵なるふきゝ〳〵用て赤箸のごとく成虫口中より出吐
又一ゝ〳〵用て虫十ゝ六ゝ口中より吐出て心下塊ゝ成て
正氣〳〵成次に追蟲湯と云ふ〳〵用〳〵白虫三ツ肛門より下て
愛の見るごとく〳〵快然〳〵四五日病人起て食ひとし
漸て本復とはなり
見明和八未年八月十八日のゝて翌十九日に八病人起出て
食をみ追〳〵元の色に成る見蛔蟲を解て蘇生〳〵ゝ
ごと〳〵院に死をさに極〳〵を虫と去て快氣せ〳〵也其妙の醫
六十ゝ歳の女兼て痢疾ゝて多年同種〳〵腹素せり中ゝやとき

ゝ〳〵ゝ也病氣痢疾たりとも執火にて胃中に虫湧ゝれば兼ら
心ゝ虫を解ゝバ本病の素処よりゝべ〳〵ゝ害に成る素にあらず
をゝめて使君子入の消蟲湯一ゝ〳〵用〳〵赤虫非ゝ大仮なり
下〳〵ゝ有家門醫師に見を告醫の曰く虫とおもとおもハ
あゝぞ〳〵見行〳〵ふゝぞや醫師〳〵てゝ彩の曰ふてハ世上
誤あゝらん一抱子の蛔蟲ハ去そべ〳〵生を蟲〳〵いり又蟲ハ
腹の内にハかさゝのごとの也然バ虫腹にありてハ病治をとも虫の為
害せらん然こそれ〳〵ゝ虫を去素を用てむ〳〵ゝてゝ
去ゝバ〳〵ゝさゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ虫と去素ハ〳〵〳〵醫師の
云〳〵ハ誤ゝり見とん世上に不知不を多へ
卦十歳に成男久〳〵病氣にて醫師の素を腹〳〵て為る漁ゝし

予ニ診脉を乞しゆへ是をみるに実にして数有腹中をみしに
心下かたくしこり腹かはくしてふくらみゴロつきだんごを袋へ入
たるがごとし是蛔虫の甚しきにてこれより薬功なしといへとひ
他医をもとめて療治させしむるにかの医来りて別条なしと
いふて薬をあたへられし是脉の実なるにだまされ医師腹に
虫満たるを考ざれバ三日目ニ心下へ差込也上痰盛ニ成て死を
是蛔虫のおほくなりて薬のきかざるゆへなることを是にて知れり
五十歳の女気ハ滞てかく不食熱出病気と成後ニ薬功なく
して是を死をはかり虫数く出しと聞り是蛔虫のなきさて不
食なりと心付を不知医師もみへざる病気の薬をあたへ
病治せざるとみへたり

右ハまのあたり見及しなり也是ニ医師末々ニ腹をみて虫の
あさてひちてるゆへきざり虫を去薬をあたへて虫を解なバ
死さるべきなまじ
六十五歳の老人飲食滞にて腹いたみ吐をなして困より予ニ診脉
を乞是を見るニ脉実にして寛腹をみしに心下腹へかけ
ころひくわりゴロつきうごきありて全蛔虫のきざしなく
ありしやと云さ無ゆ虫を解薬をあたへしに赤虫口へ出し
吐出せ然ども未腹やまざる故を一向ニ不食也ゆへ蛔虫なれバ
虫を解薬をとめべしとてものましむ然ニ薬をのめバ腹
いたむ由へ呑まじといふ然ども虫多きさてひちてるに遂ハなきさ
なれバいよいよ蛔虫を解薬を服してよろしきともとめしかバこれを

茶をのむて痛をゑゝとして不吞元十日も絶食して死せ
り色脉ハよわゝして氣性てハ不食氣力かさのこの病氣
なり虫を解茶を服して腹いたむハ虫ひゑて強由へなり
たゝひ茶を服て腹いたむとも頻に茶をとゝのゑゝバ絶ミハ仕負
虫を追退ゝ成べさふ後と不知の殘念也

右ゝ外遠境ニ近分首ゝ計十八歳の男皆病氣ゝ死せ
りと雖又三十歳計の男積てこかゝ心不へ元の食不
進色ゝ療治せゝ枝氣ゝ落命有しと雖是傷寒
病の類ゝ成て脉も実ゝして死ゑるハ蛔虫の
毒ゝ不見因り害とゝして死せゝゝ遠色と察知
ゝ下ゲ不男の才年二十歳化ゝ人と求て勸ゝ七月上旬ゝ

病氣ゝ成て醫療ゝ加くゝ成せども治不治くゝ
ゝ醫師ゝ べさ拵ゝ外の醫へ礼べさゝ別ゝ計ゝ
主人ゝ伝授新元へ遣海ゝ出ゝ彼ゝ下ゝ診脉と求ゝ脈を診
脉ハ実ゝして熱ゝ有ゝ食不食服を不ゝ心不かゝ服ゝ
つさゝるひゝあり色蛔蟲のゝさて悩と察又ハ風毒
の熱ゝありても蟲ありてハ茶不外也ゝ先虫を解ゝ
則使君子入ゝ追蟲湯計ゝあゝしゝ
ゝ虫殘茶不殘服して又虫ゝ出ゝ不熱ゝ退
服和ゝ有て食事ゝ氣さゝやゝふゝ在香砂六君
子湯とあゝへ脾胃を補ゝ
枝氣せゝ也元来蛔蟲のゝさて病氣ゝ成也若虫を

解せざるして日を経ぬれば虫ふるく長ありて心へさしの食となる
もとの蚘虫蟯の表へ見へざる恐しさとなるべし
右に池病人いづれも医師にあれば医師にもとれく遠出に
蚘虫のさざいふるとみがく不治虫と去て治せし也
若もとを不治さしく尚ら表へ見へる病の素をわるへ久しく
ありて虫ひとつ〳〵たらば死もるるべからず
世上に蚘虫は小児に有ればも大人に蚘虫はふさく心に湧もを
不知小児も人也大人も人也小児にあれば大人も有生なり
況も大人に有るく又髄の大なるもへ知がるしてれ
るらざるもへ世上もとを不知也又適く大腹へ出るとも
又口へ出るとなんて腹の内に虫湧るもへとなれども
苦ら恐るるもく又細ければやまちありてもるるとも
もとちくびさ書ともんく人紙く心ひて先こちに虫のもく
しいるもとるもんなぞまそれく不知ちに積ておびへ又不食
ありバ右く二方とそもいるもへ虫あれば大腹なれば書
の肝要と細又表へ見へざるに虫湧て有へと知べし
腹のうちに虫のもくもへ出もより食もより湿熱にもるる
色〳〵虫にもいろ〳〵の形とかして蛔のごく蛙のごく
髪の毛れごく敵魚のごく蛟のごく蛭のごく蜂
のごく蚯蚓のごく書このせてあれども悪業に見ハ
唐土の牛羊鶏猪魚熊さ分種くの荒肉食を
ふるへ虫もいろ〳〵の形とかるく有て日ばかりてハ不清の

肉と不喰ゆへ蚘蟲も多蚯蚓のごとく汁也と見へたり

専魚のごとく蜂のごとく感もわるしとなり

○和漢三才圖會曰

正親町帝時天正十三年武臣丹羽五郎左衛門長秀年

嘗有積聚病甚苦不勝其痛苦乃引刀自裁

死火葬之後灰中搖出積聚未焦盡木如

形如秦亀其喙尖曲如烏力痕有背以告

秀吉公秀吉見之以爲奇物即賜医師竹中法印

右の色れるもあり〳〵なれば驚のごとき蟲も有と見へ

さりとも考れば食はもるべきなれば浪熟深肉食と多

喰るものハ用捨あるべきなり也

蚘蟲ハ表へ不知して人と害をるの恐しきなれば元来ハかさとの

ゆへ書こそ〳〵のせてかく古書の外臺千金殿西書

大全等このせてあれども大人小児のちがひなく大成論

格致余論難經溟洄集ニハのせてかく衆方規矩小児

のみ ふかりて要をけれども傷寒論ニもなくこの金匱

一ニ小蚘闕の治素有ら已右の色也世上多見淫ゲ之理

なるべし入門ニ八種の論有余の級ニして迷有て疎と成

回春ニ有ふく尚附ニ叶と見へて専魚蛙蚯蚓の三蟲と

出して多ハ蚯蚓のごとく成と濃多ひ長一尺も成附ハ心を貫

命と落るもの也急なりと有又白虫ひ〳〵て黒色と兼附ハ

漏ずしてあれば是心ばえさるなり也

酒うり茶はこハ才一酒色といましめ有るなり むこて酒と多飲て脇よ

絶れば又勝手ゝて病氣と成ても色を忘るるもなかるべ

ゝ欲ゝても腎虚となりても怪おころ色てのうるわや

まちあるるる色に犯るるハあるまゝ けい蛇虫蟲ハ湯て

久ゝなれば有てハ是ぜゝて色ゝ人を害るなり恐べ

蛇蟲脇の内に湧て全神外邪の病氣にあらざる四へ氣の怪なり

かく脉もさゝてなるふるかく多実にして寛故に醫師茶も

茶るるふるかゝ然ども身を去ても湯るを不知して久変

成ひとゝゝどゝらばさのゝ痩もせゝ氣も性て色ゝ害と

なるなり有らん是則人蟲を殺ことあらず蟲人を殺とハ是なるべ

大人ハ蟲湧ゝく久ゝくなりていふとく長成て心下へ上ル是を

よく治せざれば心へさゝ迫危をなもそうてあ色ゝ茶もすくいぞ

故ぶゝ如るき病ハ蟲を解毒茶とのむ蟲ゝ出ゝ但大人の

虫を殺るハあをのけあゝて心下を四ゝ先ゝ灸おさへさゝり

殺るべさゝ心下かゝく又ハ和て右キ脇のふとんおさへるゝとく殺べ色て

蟲湧てひとなると知べゝ先あらゝ先始ハ消蟲湯を二三ゝ

用ひて後退蟲湯を計三ぶくめもゝ四べゝ出とのけ仏ゝ成

仏書ゝ有るせゝ病人ハ蟲そなゝる病なゝ色ゝ表へ

殺べさるゝ人何色も困ゝ不治を治せゝて色ゝを表へ

低ゝ病おゝく成蟲ゝ成なゝ色を不知表へ殺へたる病のゝ殺りを

用ひて病の本を不治ば終ゝハすゝ殺べゝ右の殺を治せゝハ

此表よりるすれの秘傳の虫はんとふと秘方の業をもん危を
治せしめ也しかるを〻〻〻医書のせてなきゆへ多て
医師の誤なるべし
大人小人虫なきと心得る人もあれどたとへらべたん老人にても
脱よ虫湧て腹中の災となる事は遠なり
評曰蟯虫は大人老人にも脾胃の運行よろく是よ熱を
兼れば虫湧苦しむ理は丈糞小陽のかわきあるゆへ
虫多湧生る也そこく食消化る事糞也是大腸へ
隨脾胃よくすけば虫とゆるはなけ也脾胃こゆ也滞
大腸へ送る事叶難ふて虫を生ると見へたり故よ
小児よ小合の虫多ゆへ滞て虫と成事あるべしと見へたり
故小児多虫多大人にも時々有て病を生ず法をありく
むしを去事を心がけてうつべき也
世に多くして虫を解ハ生虫を解ハ悪とのへる説を多
故是に迷人多いなるゆゑ是を昔より悪の云事ハ
せう猛と見へたり一抱子の本性小是ハ猛あり
ゆよ虫を去て写事ハ小虫なごと
又虫を去薬用ゆる故湯抜といふ悪流あれど是ハ湯
くせ多性なれば是を解さでれば害をなす也ハ性ハ
不絶心がけて虫と去薬をもちゆるべし
性ハ右の二方を用ひて虫をよく去て後食虫を主として
錢氏白术散を用て脾胃を補なば後よハ出べし

むしくだし蛔虫湯といふ事は有本草唐の名医も書ふ
のせをひて今蛔虫乃甚しきさはと書よのせたまへ共未
おもへは是ざるふ腹に蛔湯て有といふ事は知ものハす
又虫の恐きといふことハ書よあらハしらへども虫の湯
なるをよく是をけ事れしまへ共書このせてなし
故よ世ごとこともるしにおもをを不知蛔虫ふて過有
てもそれとハおりのざる也中くゆゑんのかぐ死おもれば
大人老人ども蛔虫の害をなをそをを無ろへべし故よ
腹に虫の苦さへをけ也べおりひらず死ることハ是を理と思ふ最
蛔虫湯て大腹へ下又ハ口へ出ることは是ざれば也と是知又口へ出
大腹へ下てもさのこおどろをそ不法出て事へべをけ也ども

一ハ始てもらをなすと知べしまた虫ハ湯て腹ハ事ても書ふ
牧ごろざる也故ふくかんぐ者に公げけるがよしいさ者よ四り
有しを世上の引合せのあるを事を
四十又歳の男久しく不食ら乳むつしく時まれあるうなら
腹薬一切ふ及び何の事ふくを平若て腹を是ふく
虫の乃也を考れ事医也へ脉を診し流しを寛也
色形乃なきさて是仮ふ仮ふ藤さし心下をあび先ふおさへ
さぐり是に是かとハ何のなくゆびさしふさるりの乃
そこふそぐばり有色沉であると是へて先不食ふ
むつしきと心下のそこよ筋なりあを是大ふと蛔虫湯て
なすこざるんと右し消虫湯ふく退虫湯ふく

ひつ〳〵のまゝもるにを羽ぶり和出三つ下一又二方の薬代
はぐいて用ひて又虫二つ下ら合すみをかをきらをきくる
逐〻食をみ者は毒りよ茶一
見おりて〳〵苦て不紅して虫湧て病をなす脈八考絃〻
一癖にて八〻〳〵〻〻蛇虫くるをを考るに八心下の
筋ぐりかくさとふ合をむつりきをん紅べまく〻
心下のをトだりそこへ〻づむともありゆびさををつく
おしてさぐるべ紅なり虫なけれやらうあてゆび
先よさつるりのなし
又二十八才し女何とも病氣のていかく只食の不進〻てむ
おりとも癌といなんと黒丸子をを服〻て不治

仍る先ゆ〻丸子虫を去の薬を用ひてゆるべ〻しと未仍く
せうこもかきふ逐虫湯をこふくゆちい〻ふ揚枝のごとき
虫二つ下て心下透食を出来〻見るて仍ともうふを
〻〻へざるに蛔虫湧てあり〻虫解〻て癌のごとく有〻も
ゆ〻うくなり〻
又代法逐村に出乃小児病氣ゆて医師の薬数〻用〻に
さ〻てよろ〻くもゆ〻さて平ゲ家の治薬ををこ〻けり仍る
逐虫湯を二ふく者〻ぬ見を用ひく虫七つ大俵より下て
子逐ゆ〻ゆく脈〻を又曰十才余疝氣ゆて陰嚢をれ脚こ
うきなりてゆくこ〻後へさ〻四ゆ病をこ茶近村ゆ名をき
医師のゆて治薬を用後するに功ゆく〻をりとをのゆばあ〻へ

とりて牧ひろうしと先きホ小児の治したるを用ひくたく
業を後して見さうしるしかるはやとるしゆへ陰裏されるへ
す白虫とて金虫湧てひもて下紙へさしゆ小後をふさぐ
也へ脚をもるく牧遍虫湯の業方と疝痛を治もの理あ
用ひてうしゆべしと遍虫湯を二ふくあさへのすしむる
小也びのごく水虫二ツ下て小後うく毒ど脚のそれひさて
心下すさびうしとて又業を用又三ぶくきして乃やしむ
いむく心よく逆て医の色と為ふせざるをん世ようむしの
為をなすといふりを不知を知べし
又三十七才の女肝積のさまて右しを脚ときたり痿中風の
ごくみて医師の業を後せをを予側分脚をるる沉ゝ

実也腹を見て心下とゆひ先さうるるのあへ也びを先さうるるの
なけ也ども心下のそこにもゝだりるを見りや蛇虫湧て肯や
えりがゝとのまゞ虫のをといふをへ人稀ども心下れそこの
もゝばりと不食さをんを見んと遍虫湯ふくの向こて用しに
腰ろ揚技乃ごときむし一ツ肛門へ下し色たゝひ病乳のこつり
後治ども右の虫を不知日沢絶てふくく長ゝ虫のあるこ
害せられん既を表へ為て不知よ腹乃うちにむし湧てあり
こを色をんとかく蛇虫いまゞ不知小治業を用るがよし
蟯虫の形を見くそを色と知て業を用るハ療治ず遍乃理也
心下へ物さうこりうを捨おけべ徒人ども内分害するゆへホ
物りくへ不知して命を知の危なり

前よりあるごとく腹のうちにあるゆへ自然あるをそれと知るべしこれ
外よりの邪気にあらざるゆへ故に灸右の腹を世に知るもむ
小児の側より灸を付大人は十日ばかり中人老人にあるも皆
自分に灸をすべしすべし退虫湯を飲したまふべし病重ければ
数日に二三ぶくも用ひてよろし虫の色べに玉茱萸
此後世書を見て人小児はいふまでもなく大人にても腹とむし湯とを
心得ずして病氣となるべし数のものをそれと不知虫を去
あらざるゆへ長生なりあるによろしからん

○蛔虫を去る二方茱萸の事

せんだんの根あら皮の赤きもの
けずりのけるなり二三
きざみ煎じ用ひ

○消虫湯　使君子肉桂苦練根皮三味

小児は耳艸を入てもよろしべし

此茱萸蛔虫をよく去るのみならず元来陳湯に加味なるゆへ病を去心下を
能くすべし病を治ずして小児をよくしてかつ病をも
ともに除て用ひたるゆへ此退虫湯だけを多く二三ぶく
用ひてはたちまちに未それと表へ不知虫を去腹中よく
調ひ病となるべきゆへ前より来る毒大人小児用ひ此退虫湯を
用ひて腹いたむことなくべし虫をみてひやうを知消虫湯を二ぶく

○退虫湯　海人草　陳皮　半夏　茯苓　桃仁　苦練根皮　使君子　耳艸

此茱萸蛔虫心下へ上りて下を治ずして大人小児とも虫ひやうを心下へ
ちりて凝ず故心下かたくなるゆへ虫ひやうを知べし此消虫湯を
先二ぶく用ひて退虫湯を五三ぶく用てよし

用ひて又逆虫湯を服し用ひあぐ終に虫を逐ひ去る
色をもちいて服ひあぐべし虫死するを以て除く二方共
用ひて虫を去れ心得ざるもなくば災と成べし
大人小児とも蛇虫を解したる法にハ錢氏白朮散欽香破
六君子湯を以ふく用ひあぐべし脾胃を補ふ
○香砂六君子湯ハ人参白朮茯苓陳皮半夏薑香
香附子砂仁甘草おのくこうぶしさんにんかんそうを水せんじてりちゆ
以茶ひねを補ふ虫生ずるもとなり
煎じて茶をせんじるハ熱つまりなるハ悪しきを又虫生茶を
のむものあるハ熱を附又ハ心乃ちがなる時ハよろし
蛇虫を付　皇甫隆上統之語之事

皇甫隆ハ百歳にして耳目聰明體力不衰顔色和悅盛
魏武帝問曰長生之事如何偽授ありてハ蜜と偽よこゝ
四ハ隆上統して曰人の貴不貴生より貴ハなし　無始劫運
無窮世界乃長盡ことなきをふらべて人生たとひ百年
はるとも電の遇ぐおとゝ再生不来故に情を抑て性を養て
自保ずゝ細たゝ朝ゝ漱を以中に液てこゝを呑歯を啄
三尸を去今四海泰平の際徳を布る萬年ゐも出べしと
右皇甫隆の答ヘ　情を抑て心を養ふ自と身をたもつかけて保ふ
抑て順の故を再生て不来ものゝ
すゝとゝ朝ゝ漱液を口中に液て呑ハ氣血を助
腦髓をたすけ歯を啄ハ上下啄せてたくゝみする

是又弁を固く三尸を去ゆ是則人の腸ゆ虫の湧生ずれば
時行の疫ならずして何ぞ不快とかゝ又尸湯てひろゆ
とき八急死をなすの方事ゆへ皇甫隆是を伝ねて
尸を去ゆとをしゆん又隆乃えるごゝ今雖ども四海
泰平ゝ御代弥代ゝ軍八なけれども自ゆゝ伝ゆゝ寿命八
成べきならん又徳を布る萬年も由べしと八人の急成
救人の弱を解人の害をなさば天乃世界を恵めゝ
ゝ徳を布ゆゝ自然とそゝ徳よりて長生萬年も
ゝるべしゝの譬ならん

千金方養生之語に蚊蚋を殺ことゝあり是四神ゝ
玄武ゆえば之如ゆゝ益ゝ生を殺ことゝ八其分外ふゝい

ゝゆ孫とも長壽の方と知べゝ也是古人ゝ誡也

老人心得ゝ条事

老ふいゝうて八脾胃のちから弱なるゆへ合こなる事も遅く小児ハ尤ゝ
腹に尸生ゝ安し然尸湯ても おゝてへ知して病気をなゝ又八虫ひゝ未知
あゝ医て表へ見へぬ尸乃為ゝ害せらゝゆもみべきあゝ事ハ先乃行げ
なくとも地りゝ蛇虫を去ル用心あゝ事ゝ長命衛生ゝ伝ゆゝ
よゝしきゆえ尸尸生ゝ尸ゝ為ゝ八代表の逆尸湯ゝ用ひてかんべゝあゝ

秘傳大人小兒衛生論　坤ノ巻終

源をさす時は流長く根深くして枝茂
く花道理にして文元天地の間生ずる物養
ひ育くまるゝ所なし 予が舊友井子義八
風流の士にして古道を好み只名醫の未
病を治する術へ一生を尽ひ閑日一書
を著し夫人の雪月花を楽しみ平生中も
やうゝして身心こゝに病なく病なきに
つゝされば真の樂を得ること深く感し
其著は皆生を書ふるものなれば古人も

諸の技心に皆若心より起る故に老弱の
病なく食料菜蔬小心を要して信仰を
求め得べし 諸の病を深くさとれば天壽を
保つ理なり聖賢の測を知て此出小を
理を能よ説く毋人小見を意を深切
や此書を讀ばこに有益なる事
つゝす幾は實に作者の本意なり 嘉永己
酉歳七月乙卯新月正す

浪華 田中陳竹識

河州住太天神宮本之隱士
本井子嵐藏

文化九年壬申春正月求版

浪華書林
谷町三丁目
丹波屋榮藏
心齋橋通北久宝寺町
加賀屋彌助